

題材②〔特派員メモ「青い珊瑚礁」飯高恒一

(朝日新聞平成19年4月13日金曜日 朝刊)より]

地震と津波に襲われた南太平洋のソロモン諸島。震源に近く多数の死者が出たギゾ島に入るため、約50キロ手前の島の町ムンダから1時間半近くかけてボートに乗った。首都ホニアラからギゾ島への空路の直行便が止まったためだ。

ボートの長さ約5メートル、定員10人。横殴りの雨で、ビニール屋根があっても乗客6人はびしょぬれになった。現地を見たい気持ちがはやり、恐怖心はなかった。

帰るまでには空路は再開されたが、ムンダに荷物を置いてきたため、ボートをまた使った。余震が続くギゾ島で不安な一夜を過ごし、津波再来を恐れて丘に上がる体験もした後だった。「津波は沖に出れば安全」と聞いていたが、出航直後に激しい波で揺れ、古いボートはいかにも頼りなく見えた。

でも海上の天候変化は速い。途中で雨がやみ、波も穏やかに。その時だ。しょっぱい香りの風に身をゆだねると、青空と珊瑚礁が視野に広がった。「ああ、私の恋は——」。何故か松田聖子の「青い珊瑚礁」を口ずさんでいた。

数百メートル向こうから、カヌーで海の散歩に出たらしい親子がこちらに手を振ってくれた。千近くの島々からなるというこの国の普段着姿。ほっと息をついた。

「漢字直しA」

じしんとつなみにおそわれた みなみたいへ  
いようのそろもんしょとう。しんげんにちかく  
たすうのししゃがでた ぎぞとうに はいるた  
め やくごじゅっきろてまえの しまのまち  
むんだから いちじかんはんちかくかけて ぼ  
ーとにのった。しゅと ほにあらから ぎぞとう  
への くうろのちよっこうびんが とまったた  
めた。

ぼーとのながさ やくごめーとる ていいん

じゅうにん。よこなぐりのあめで びにーるやね  
があっても じょうきやくろくにんは びしょ  
ぬれになった。げんちをみたい きもちがはやり  
きょうふしんはなかった。

かえるまでには くろはさいかいされたが  
むんだに にもつをおいてきたため ぼーとを  
またつかった。よしんがつづく ぎぞとうで  
ふあんないちやをすごし つなみさいらいを  
おそれて おかにあがるたいけんも したあと  
だった。つなみは おきにできればあんぜんと

きいていたが、しゅっこうちよくごに はげしい  
なみでゆれ いるいぼーとは いかにも たよ  
りなくみえた。

でもかいじょうのてんこうへんかは はやい。  
とちゅうであめがやみ なみもおだやかに。その  
ときだ。しょっぱいかおりのかぜに みをゆだね  
ると、あおぞらとさんごしょうが しゃにひろが  
った。ああ わたしのこいは――。 なぜか  
まつだせいこの あおいさんごしょうを くち  
ずさんでいた。

すうひゃくめーとる むこうから かぬーで  
うみのさんぽにでたらしい おやこがこちらに  
てをふってくれた。せんちかくの しまじまから  
なるこのくにの ふだんぎすがた。ほっといきを  
ついた。